

事一念三千論の一考察

星 野 行 秀

は し が き

事一念三千とは、日蓮聖人が自らの体験によって明らかにされた一切衆生の成仏の原理であり、成仏の現実世界が説かれたもので、信の一念三千であり、南無妙法蓮華経である。この日蓮教学の根幹をなす教理である事一念三千論について、ここに日蓮教学の学者「田中智学居士」「山川智応博士」「望月歆厚博士」の各師の論の解釈をもとにして考察を行ないたい。

一 田中智学居士の事一念三千論

田中智学居士は三大秘法を日蓮聖人の教学の中心と考察され、三大秘法の結論として事一念三千を論じている。この事は『日蓮聖人乃教学』の科段から理解できる。そのため、事一念三千の解釈について、「法門とし

ての三大秘法を観行としてことわるときは事一念三千と称するのである。」⁽¹⁾「三大秘法を観の方面から見れば事一念三千の妙観である。」⁽²⁾「三大秘法は事行の南無妙法蓮華経といい、また事一念三千の観法とも称している。」⁽³⁾と著述されているのである。

又、田中智学居士は事一念三千を理一念三千（理論的心証的なもの）に対し、実際の活動的なものとしてとらえていたと思われる。その理由は、事一念三千の結論的解説において、「一念三千の妙理をただちに人生事実の上に發揮して、人を救い、国を治め、世を利用して行く所の活方面に應用するのを事一念三千というのである。」⁽⁴⁾と著述されているからである。

事と一念三千については、「事とは迷悟を超越した本仏果上の事のことであり、本領的实际的の意味である。」⁽⁵⁾「一念三千とは成仏の道理を組織的に説いたも

ので⑥)、この目的は十界五具ということを事実上に結論することである。」⑦)と述べている。

事一念三千と妙法五字の關係については、「壽量品に説かれた三身常住一念三千の妙理を呪し出したのが、本門壽量の肝心妙法五字である。」⑧)「事行の南無妙法蓮華經を事一念三千の觀法である。」⑨)と解釈している。

事一念三千と信の關係については、「一念三千の觀法が直ちに信そのものである。」⑩)と解釈している。

しかし、事一念三千と妙法五字、事一念三千と信についての論理的分析は行なわれていないようである。

二 山川智応博士の事一念三千論

そしてさらに山川智応博士にいたっては、田中智学居士の事一念三千論の論理的根拠を明らかにするために事一念三千論を展開しているのである。

山川智応博士は『開目抄』にあらわされた一念三千がおのづから法体と仏種と信証という三義を示して、名前は天台の一念三千と言われても、実は決して天台の一念三千でないことが示されていることを発見した⑪)。

法体の一念三千とは、昭定の五五二頁七行「迹門方便品は」から五五二頁十三行「一念三千なるべし。」まで

の文で、本門壽量品の積尊の願本があつてはじめて成立する法門である。

仏種の一念三千とは、昭定の五七九頁三行「真言・華嚴等の経経には」から五七九頁九行「天台智者大師一人此法門を得給えり。」までの文で、水中の月、根なし草の一念三千ではなく、一念三千の法門の構成は迹門も本門も異ならないのである。

信証の一念三千とは、昭定の六〇四頁七行「又仏になる道は」から六〇五頁四行「靈山にまいりて返てみちびけかし。」までの文で、一分の慧解のない不惜身命の信念成仏であり、一念三千の玉をいだけの妙法蓮華經を信じる受持の成仏である。

以上のように、日蓮聖人の事一念三千には、法体の一念三千、仏種の一念三千、信証の一念三千の三つの範疇が窺えることを明らかにされた。

山川智応博士は、「当家の一念三千は信心の一念三千である。」⑫)「本仏の心法に対して、不自惜身命の信念を以て帰命没入することが即ち南無妙法蓮華經であり、事一念三千なのである。」⑬)「凡夫直ちに本仏・本化の心を以て心とするという簡單明快なる信心血脉こそ本化正統の事一念三千である。」⑭)「三秘ごとく信心の

一念三千である。」(16)と解釈されている。この論理的根拠となる信立脚の一念三千の構造を論じたい。

衆生がこの法界は本仏縁起の法界であり、我々はその中に在ると信じる時、九界も無始の仏界に具したることを信じたのである。このように信じる時、我々は本仏体内の九界となるのである。本仏体内の九界とは、教相面からいえばとりもなおさず本化菩薩の眷属となることである。その時にまた本仏は我が父であり、我が仏界であるとなつて、(無始の)仏界も無始の九界に備わりてとなる(16)。仏界も無始の九界に備わりてであるとする時、その本仏の諸法実相、慧光照無量、每自作是念の功德は、我々行者の分々の中に顕われなければならない。そして仏界所具の九界としての我が身心、九界所具の仏界としての我が仏性、この内外相応・因縁和合して、法界ごとごとく本門の一念三千、本仏の一念三千として、おのおの本来の功德利益を活現し、常寂光土の世界を顕現する。その現実の姿を、真の一念三千、事一念三千というのである(17)という、この信立脚の一念三千の構造により、不惜身命の信念受持によつて、本仏果上常住遍照の一念である南無妙法蓮華經を信念受持する時に、仏の因果の功德を譲り与えられ、仏心即凡心となるからま

た凡心即仏心となり、本仏・本化が却つて我等一念の中の本有の功德となると考察されている(18)。このように山川智応博士は実践的な救いを、信念、信心、つまり信に重点をおいて、信立脚の一念三千の構造を明らかにし、事一念三千を論じている。

三 望月敏厚博士の事一念三千論

それに対し、望月敏厚博士の事一念三千論は、事一念三千の「事」、「一念」、「三千」、「妙法五字」のそれぞれの語句について論理的に分析し、考察していることと、「事一念三千」と「妙法五字」の関係について考察していることである。

「事」の表現とは、複雑を去つて純一に、観心を去つて体験に、知解を信仰に、個人を社会に、理論的法界を人間の実証に、三世を現在に結歸したものである。要は死法門を活法門たらしめんとした努力である(19)。

「事」の思想とは、理本覚から事本覚へ、哲學的事から宗教的事へ、思惟的事から体験事への転進であり、(20)観念、理性、法理を超えた實際的、具体的、体験的な有相の事、經驗の事を重んずることである(21)。また、仏徒として積尊を三界の教主と仰ぎ、その統領する世界に

在る仏子たるの信仰から、その法の具体的顕現を以て、自己並びに時代社会國家を有機的に統一し、そこに現在する世界を浄土実現の世界と見ようとすることである(22)。

「一念」とは、凡夫に在っては信心の一念であり、仏の成就された果上の一念が、凡夫に顕現した一念である。つまり、仏果果上心に同共の一念をもって、事一念三千の一念とするのである。即ち大覺世尊久遠実成当初証得の一念である(23)。

「三千」とは、諸法であり、有相可見の世界である(24)。

「妙法五字」とは、法華經の全体そのものである(25)。

「妙法五字と三千の関係」とは、同一体である。しかし、同体の二法が表現を異にする限り全同ではない。五字を袋・蔵というのは外皮・容器の意味でなく、三千を具足し、三千を収約する義である。つまり、一念三千は具足の袋に収められるの法門、五字はこれを収める肝要の法となる。次に理・教に分対するのにもまた両者の異相である。三千と五字とは等しく事の法体であるが、五字は法華經一部の肝要の教法であり、一念三千はこれを開いて理義を分別した談道である。換言すれば、一念三千は基本的理義として語られ、五字は具体的教法―要法―

として与えられている。つまり、一体二相が五字と三千の関係である(26)。

この関係により、「事一念三千」と「妙法五字」の関係は次のようになる。

「事一念三千とは南無妙法蓮華經の觀心以外にあらざして、その体不二である。」(27)「事一念三千觀とは事行の南無妙法蓮華經をいう。」(28)「事一念三千の顕発とは妙法五字を信唱する以外にはない。」(29)「事一念三千全体が妙法蓮華經であり、妙法蓮華經全体が事一念三千である。」(30)

小 結

各三師の論をまとめると、田中智学居士は事一念三千の組織体系化をなし、事一念三千を実際の活動的なものとして解釈した。山川智応博士は、信立脚の一念三千を明らかにされ、事一念三千を信の一念三千であると解釈した。望月敏厚博士は、事一念三千と妙法五字の関係を論理的に分析し、事一念三千を妙法蓮華經であると解釈した。このように、「田中智学居士」「山川智応博士」「望月敏厚博士」と時代を経るにしたがい、教学的理論が深化し、信仰の実存の解明、宗学体系化に向かってい

くありさまが理解できるのである。

註

- (1) 田中智学著『日蓮聖人乃教学』四二二頁。
- (2) 右同 四一六頁。
- (3) 右同 四一一頁。
- (4) 右同 四一七頁。
- (5) 右同 四一四頁。
- (6) 右同 四二〇頁。
- (7) 右同 四一八頁。
- (8) 右同 三一六頁。
- (9) 右同 四一一頁。
- (10) 右同 四四七頁。
- (11) 山川智応著『開目抄講話』一〇〜一三頁。
- (12) 右同 二二六頁。
- (13) 山川智応著『観心本尊抄四十五字法体段正義』八頁。
- (14) 山川智応稿「再び一念三千の法体と行法を論ず」(大崎学報八八号所収) 四一頁。
- (15) 山川智応著『開目抄講話』二二七頁。
- (16) 右同 二三五〜六頁。
- (17) 右同 二三八頁。
- (18) 山川智応著『観心本尊抄講話』一三五頁。
- (19) 望月歆厚著『日蓮教学の研究』一二二頁。
- (20) 右同 八二頁。
- (21) 右同 八三頁。
- (22) 右同 九六頁。
- (23) 右同 一二五頁。
- (24) 右同 一一六頁。
- (25) 右同 一一四頁。
- (26) 右同 一一七頁。
- (27) 望月歆厚著『観心本尊抄講話』五五頁。
- (28) 右同 五五頁。
- (29) 右同 四八頁。
- (30) 右同 二五八頁。